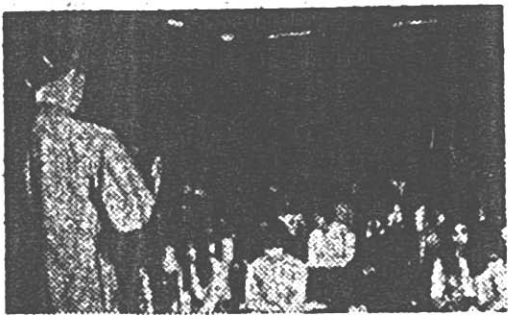
熊日1971.05.20

"観光より公害研究"

川崎市の女子高生　水俣に修学旅行

「観光よりも研究テーマを持った修学旅行を」ーと十九日、日本女子大付属高校（川崎市宮）の二百人が水俣市を訪れ、同日夕、湯の児温泉「山海館」で浮池市長、橋村保健衛生課長らから水俣病について話を聞いた。



熱心に浮池市長から水俣病の話を聞く生徒たち

同校はこれまでの観光に重点が置かれがちだった修学旅行を反省し、九州に関して何かの研究テーマを決めて旅行しようということになり、そのテーマの一つに水俣病を選んだ。七泊八日の九州の旅で、三年生三百人のうち南九州班二百人（百人は北九州班）が十九日午後水俣市に到着した。

同校は川崎市にあるがほとんど東京から通学する女生徒で、水俣病には大きな関心を寄せているという。また川崎市が進めている社会福祉教育の推進普及校でもあり、児童福祉開発の研究もしており、水俣病の胎児性患者にも目を向けていた。

浮池市長らは胎児性患者などの今後の行政的責任など約一時間にわたって話したが、市長がこうした席上顔を見せたのは初めて。生徒たちも終始メモを取り熱心に聞き入っていた。

湯の児で一泊したあと二十日熊本市を訪れ二十一日には東京に帰るが、帰ったあとレポートを発表することにしている。